

2024年6月15日（土）～16日（日）

第25回日本認知症ケア学会 東京

コロナ禍を経験した認知症病棟のスタッフの心理と行動の変化の検討

医療法人聖志会 渡辺病院 看護部

野村 真季、安村 尚美、作永 真由美

【目的】2021年～22年にかけて私達の病棟では、2回の新型コロナウイルス感染症のクラスターを経験した。今回私達は、認知症病棟のスタッフの心理と行動に変化が見られたので報告したい。

【倫理的配慮】調査の趣旨を管理者に説明、同意を得、個人情報・秘密保持に留意した。

【方法】スタッフに対し、1回目のクラスター終了後「感謝・反省・その他の思い」について自由記述方式にてアンケートを行ない分析した。2回目のクラスター発生時には、日々のミーティングで見聞きしたのからスタッフの意識・行動の変化をまとめた。

【結果】1) アンケートでは37名中32名から回答を得、4つの項目に集約し細分化した。

- ①クラスター発生時のスタッフの心理的動揺：未知のウイルスに対する不安、入院患者さんや自分達の発症に際し、患者さんやその家族や他のスタッフに対する自責の感情。
- ②心理的動揺の原因：感染した患者さんの病状変化の速さ、コロナ対策に関する情報伝達の不備や対策への理解の不足。
- ③仕事への思い：「クラスター中でもいつもと変わらない十分なケアをすることが私たちの仕事。」との言及の出現。
- ④スタッフの一体感の強化：コロナ禍を乗り越える過程で、感染し休んだスタッフに「休んでもお互い様。お帰りなさい。今日も頑張ろう」と労いの発言。

2) 2回目クラスター時の意識・行動の変化

- ①自主性の出現：「指示待ちでなく、自分達の知識を活用し、自分達で決め、自分達で動くべきだ。」という考え・行動の出現。
- ②前向きな思考：1回目のコロナ禍を乗り越えたことにより、2回目のクラスターではその経験をいかし、感染対策、情報共有、スタッフ間の絆の重要性を共有しつつ、次の課題の洗い出し。

【考察】 病棟においてコロナ禍を経験することによりスタッフの心理と行動が変化することがわかった。